

原油価格高騰の元凶は米国では？

東洋大学 経済学部 教授 小川芳樹

2004 年末に 1 バレル 40 ドル代前半であった WTI 原油の価格は、2005 年 1 月に入ると 40 ドル台後半へ上昇し、しばらくその水準を保った。その後 2 月下旬に入ると 50 ドル台前半に突入し、3 月半ばからの 1 週間あまりは 50 ドル台後半に達した。57 ドルを超える局面も一時はあり、2004 年 10 月に記録した最高値をあっさり更新した。

OPEC は定時総会を開催して 3 月 16 日に日量 50 万バレルの即時増産と必要があればさらに日量 50 万バレルの追加増産を行うことを決定した。しかし、その後 1 週間の価格動向をみると、この OPEC 決定を嘲笑うかのような挙動を石油市場は取ってきたといえる。

2000 年、2004 年いずれの原油価格高騰でも、OPEC に注視の眼が向けられてその都度 OPEC は生産枠拡大を決定したが、増産すれどもすれども暖簾に腕押し之感を否めない。原油生産余力が乏しくなる中で今回も同じ轍を踏みそうである。原油価格高騰となると、すぐ OPEC を叩くという方式が定番であるが、叩き甲斐があるほどの元凶といえるのであろうか。

最近の原油価格高騰でもう 1 つ元凶の槍玉に上げられているのが、経済過熱する中国の石油需要増である。WTI 原油の価格が 55 ドルを超えた 2004 年 10 月の場合にはアジア指標のドバイ原油の価格が 30 ドル台後半にとどまったが、今回の高騰ではドバイ原油の価格も 40 ドル台後半まで上がった。従って、中国の影響も大きいと考えられるが、不確実な情報に基づく予測に振り回されている面も少なくない。

もう 1 つ我々の意識の中で見落としがちな元凶は、石油製品需給、ガス需給など米国末端市場の挙動と供給面でのクッションの脆弱化である。2000 年頃から昨日は暖房油、今日はガソリン、明日は天然ガスと入れ替わり立ち代わり猫の目のように末端エネルギー製品のどれかが米国市場で高騰し、結果として原油価格を高止まりさせている。これらの製品はすべて NYMEX に上場されており、投機の動きがこれに輪をかけて動きを増幅する。

米国の原油在庫増の情報で 3 月 23 日に 53 ドル台へ軟化した原油価格は、米国ガソリン価格の高騰で 3 月 24 日には 55 ドル近くへ再上昇した。事ほど左様に米国の需給構造問題とニュースによる期待形成に日々振り回されているといえる。外因を求めて「OPEC だ」、「中国だ」と非難するのも結構だが、我が身を正す工夫も少しは考えてほしいものである。